

第60号

平成19 (2007) 年12月15日

広島市中区国泰寺町1丁目2番49号
〒730-0042 広島国泰寺高等学校内

鯉城同窓会

電話 (082) 241-9777 FAX (082) 248-7341

E-mail rijo@orion.ocn.ne.jp

URL http://www.rijo.gr.jp

鯉 城

夢にまで見た入場行進。一歩一歩、甲子園の土がからむ



マスターズ甲子園に出場

「幻の甲子園」が59年ぶりに実現

元高校球児が集う「マスターズ甲子園2007」が6月17日の「父の日」に甲子園球場で開かれた。広島、山口、石川など全国八県から参加。一チーム一試合のルールの中で元気がいっぱい白球を追った。59年前に当時の鯉城高校は地区制実施で甲子園出場を果たせなかった。そのころのメンバーから聞いていた悔しさをマスターズ甲子園大会の事務局に訴える文書を送ったのがきっかけで、入場行進と開会式、7分間のシートノック、終球式と一連のセレモニーに参加できることになった。

前日から乗り込んだ総勢50人のOB、OGたちの興奮度は高くなる一方。入場開始の直前は口数も少なく、ユニホーム姿もりりしく、緊張気味。

最終組のわがチームの行進が始まる。甲子園球場の黒っぽい土に足を踏み入れた瞬間、涙腺は全開状態。一歩一歩踏み締めるたびに、何と表現しづらいのか誠に不思議な感動に包まれた。「幻の甲子園組」の四人は緊張した面持ちで、涙いっぱい浮かべて力強く先頭を歩いていた。

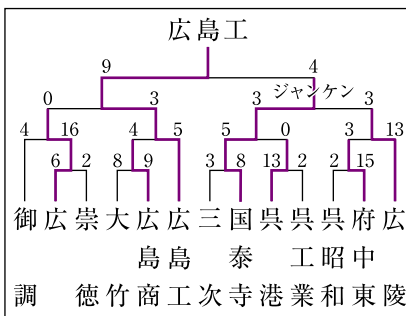
■ 県大会は準優勝

マスターズ甲子園2007の広島県大会は、本大会に先立ち4月7日、14日、21日、5月5日の四日間で十三チームが参加し、呉市総合スポーツセンター郷原球場で十二試合が行なわれた。

わが国泰寺チームは初出場ながら初戦を強豪三次と対戦8-3と楽々勝利して二回戦へ。今度は呉の古豪呉港を5-0と完封、ベスト4へ。

準決勝は強豪広陵。3-3と相譲らず。勝負はジャンケン勝負に持ち込み、好運にも決勝進出となった。

決勝は広島工と対戦したが、若さあふれる広島工に及ばず9-4で敗れた。この結果、県代表には広島工が決まり、甲子園でも大阪の天王寺を大差で破って広島工の強さを誇示していた。





「鯉城の夕」涙声高らかに

昭和25年卒 田村 鋭治

昭和23年広島県秋季大会で、一日に準決勝・決勝と23回を完投し優勝。春の甲子園出場の内定を受け、正月返上で、いも畑で猛練習をしていたが、突然の学校再編成でナインは、国泰寺・基町・観音と散り、夢であった甲子園は幻に終わった。

今年、第4回マスターズ甲子園を目指した国泰寺高校OBチームの山本将司君らの出した嘆願書「幻の甲子園メンバーをグラウンドにー」が、大会本部の粋な計らいで認められ、今秋から甲子園改修工事をするので、終球式で出場してほしいとの知らせが届いた。

開会式には、当時の優勝メンバーの写真を持ってOB選手50人が堂々と入場行進。出場8校の試合後、全員がホームベースを中心に整列し、「鯉城の夕」と「校歌」を熱唱した。すぐそばでバツテリーを組んでいた亡き「渡部克幸 捕手」の写真が見守る中、「これから始球式ならぬ終球式を行います」のアナウンスで、59年前に甲子園を目指した仲間の思いを白球に込めて投げた。感極まったりきんできました。この日の甲子園は感謝の日であった。

昭和24年併卒 門村 浩

感動の一日が始まった。高まる胸を押さえつつ臨んだ入場行進では、砂場のようなグラウンドで、ぼろぼろのグローブをはめ、

白球ならぬ黒く汚れ破れかかったボールを追って練習に励み、一足に入れたコメ持参で遠征に出かけた一中時代、「幻の甲子園の曲線となった戦後学制改革の経緯と功罪などが走馬燈のように脳裏を駆け巡った。

久々に握った硬球のキャッチボールは、今の私の身体能力を試す機会でもあった。圧巻はやはり「終球式」。田村投手の渾身の一球を見守り、何とか脇役を務めてほっとしたところで感極まった。

今回の参加で戦後学制改革の負の遺産たる「幻の甲子園」は消えた。しかし、私の文武両道生涯活動の源郷である広島一中・鯉城高校とその野球部が私の中から消え去ったわけではない。源郷への帰郷を繰り返して、熟年社会における健康で活力ある生涯活動を楽しみたいと思っている。感動とともに、こんな処世訓を与えてくれた仲間へ感謝。

昭和27年卒 教誓 憲雄

後輩諸兄のお陰で、幻の甲子園が現実の甲子園に。後輩達の実行動力には頭が下り、実現した事に感謝の念で一杯である。

野球はあくまでも「道」であり「希望」でもある。田村先輩にとっては一球の甲子園であり、失敗は許されない。投球される右腕だけしか目に入らず、あの広い甲子園が私にとっては狭く感じた。またグラウンドに立ち、先輩・

後輩と一緒に鯉城の夕・校歌を斉唱できた事は、一生忘れる事が出来ないであろう。斉唱中はメロメロで涙が止まらず、鯉城の夕が歌えた事に感動を憶えた。ここに渡辺先輩が存命であれば尚更の事であらう。

現役の選手より一足先に甲子園に行けた事は、彼等にとっても良き刺激、励ましとなった事と思う。今後の活躍を祈念し、同窓の方々の一層のご支援・ご協力をお願い致します。

昭和34年卒 滝村 修平

今夏、山本将司君(昭和58年卒)の並々ならぬ尽力により、思いがけずマスターズ甲子園に出場することができた。特別枠とはいえ何十年も憧れていた甲子園のグラウンドで入場行進し、シートノックし、加えて終球式ではマウンドに立ち、投球する機会も与えられたことは感激の一語に尽きる。かつて甲子園を目指した白髪頭の元球児達が、足を縛らせながらも、嬉々として球を追った姿は忘れられない。

大会の最後に球場に流れる「鯉城の夕」をバックネット前に一同整列して聞いた時には、目に熱いものが込み上げてくるのを禁じ得なかった。プロ投手として登板したこともある甲子園だが、現役高校生がフィールドに立ち試合をする感激は全く異質のものであろう。いつの日か母校の後



「マスターズ甲子園」協奏曲

輩諸君が甲子園出場を果たし、アルプススタンドで我々OBも若い人と共に大きな声で応援したいものである。

後輩諸君、頼むぞ。頑張れ！

昭和39年卒 田川 雅之

この出場は、「幻の甲子園」組の想い出作りだけでなく、一中・鯉城・国泰寺高校の歴史を再確認して頂ける機会になったような気がする。

私は25年前、野球部のお世話をさせて頂いた。当時の生徒達が中心に、先輩達への心配り、そして何よりも自分達の甲子園に対する熱い思いを大変な努力や貴重な時間を割いて実現させたことに、大きな意義もあったように思える。野球部OB会員のつながりが深くなり、現役大学生達迄にも輪が広がりがつあるとも聞いている。先輩として期待している。

甲子園について

一言で、広い・大きい・高い。広島市民球場の何倍もあるような気がした。

学生野球の夢である甲子園球場で、年齢に関係なく、自由に楽しくプレーができる。これが「マスターズ甲子園」かな！

昭和58年卒 山本 将司

5月23日、突然かかって来た招待の電話。それは、マスターズ事務局の責任者の方からだ。予選の決勝で敗れた絶望の中から、一通

の嘆願書に託した思いに差し込んだ光。ただただ、うれしさがこみ上げる。しかし「冷静に」と気持ちを落ち着かせ、返事は後日に。

「さあ、どうする」数人に詳細を連絡。

参加する意義。それは、まぎれもなく「幻の甲子園組」の先輩方の参加。多忙、入院中にもかかわらず快諾して下さいました。そしてついに、6月17日、憧れ続けた「甲子園」。多くの先輩方が長年築き上げて来られた歴史。その歴史が動かしした現実。

「その一球」に感動し涙し、酔いした。その場に立ち合えた事の幸せ。そして、なによりも「絆」という宝物を手に入れることができた。

この夢のような出来事を実現させて下さった関係者の方々に心より「感謝！」

昭和61年卒 秋田 成人

今年3月、「幻の甲子園」を現実化に一言合言葉に、マスターズOBチームを結成。4月には広島予選が開催され、三次、呉港を撃破。5月5日の準決勝で広陵に引き分けの末、ジャンケンで勝利したものの、続く決勝で県工に敗れ、甲子園行きは再び「幻」となった。

この時点で、野球部総会は6月17日開催で決定。そんな矢先の、山本先輩からの甲子園出場の連絡。「え!!マジ!?でも総会は?」

結局、滝村OB会長ご了解のもと、総会出席者には、マスターズ

甲子園出場のため、総会は中止とする旨を連絡。急遽、甲子園参加者を募り、総勢50名が参加することとなった。

6月17日、「幻の甲子園」が現実となるその瞬間まで、まさしく盆と正月が一緒に来たような、強烈な三ヶ月だった。

平成4年卒 木本 地郎

生まれてこのかた、33年も憧れ続けた甲子園に本当に入場できるのか、と入場行進を待つ通路で思い続けた。その暗い通路から見る甲子園は光り輝いていた。早朝の快晴で光る外野の芝。入場する選手達を圧倒する興行きのあるスタンド。そしてやわらかな黒色を放つ内野の土。どれをとってもわれわれには特別な所だ。

あの芝や内野の土の上で、7分間シートノックによる出場を許可されたのだ。その7分間の時間調整を主にさせていただいたのが私だった。たかが7分、されど7分。この時間調整は困難を極めたが、田村会長の「終球」によって、すべて報われた気がした。今回の甲子園出場決定から準備に携わってきた人たちの多くが、同じ思いをしたのではないだろうか。

最後に甲子園出場でご尽力いただいた鯉城同窓会、及び当日現地に駆けつけて下さった鯉城関西同窓会の方々に感謝を申し上げます。

OB講演会

10月31日、OB講演会が開かれ、今年は名古屋から大同特殊鋼株式会社会長の、高山剛さんにお越しいただいた。高山氏は昭和30年に国泰寺高校を卒業、一年間の浪人の後、京都大学法学部に進学、卒業と同時に大同特殊鋼(株)に入社、代表取締役社長を経て現在は会長の任に当たっている。

昭和30年の卒業生は29年前に鯉城同窓会の当番幹事を勤めたのを機会に「山王会」を創設、会報「えにしだ」を毎年発行するなど結束の堅い同期である。71歳という年齢を感じさせぬ力強い声にも、名門国泰寺卒業生の誇りと自信を感じさせる講演だった。以下、講演要旨を紹介する。

なお、講演の最後に、会社説明をされたが、「特殊鋼」の意味、航空機、自動車等の重要な分野へ



高山 剛 氏

母校の誇りと自信を

大同特殊鋼会長・高山剛氏

正しい情報を見究めよ

の使用状況等に、生徒の目を輝かせるものがあつた。
55年前、一年生の時、OB講演会があり大先輩の故灘尾弘吉氏(大正7年卒、元衆議院議長)や織田幹雄氏(大正12年卒、元アムステルダム・オリンピック三段跳び金メダリスト)の話を聞き、大変感動したことを思い出した。私は大先輩のような感動を与えることはできないが、高校時代の思い出と後輩の皆さんに伝える五つの指針を示したいと思う。

小学3年生までは戦前の教育を受け、まさに軍国少年時代だった。終戦によって社会は民主主義

に急転、教育は誠に中途半端な時期を過ごした。矢野中学に入り野球部に入部、勉強もしないで朝から晩まで野球漬けの日々を過ごしていた。

当時は海田高校に進学すべきだったが、恩師の助言により、国泰寺高校を目指した。ドロ縄の受験勉強の末、見事に合格、越境入学のため汽車通学。急に大人になった気分になったものだ。

野球とテニスしか知らなかったが、サッカー、バスケットボールなど洒落たスポーツがあるのを

知る。また臨海合宿、マラソン大会、弁論大会など学校行事も想い出深い。当時は学力とスポーツの文武両面で、広大附属、国泰寺、修道の三校が比較されていた。予備校のない時代だったため自宅で両親が体を心配するほど勉強をし、その結果、京都大学に合格することができた。学生運動最盛期の時代だったが、ノンポリ学生として自由に青春を謳歌した。

ここで後輩の皆さんに伝えておきたい、私自身の体験から得た五つの指針を申し上げて私のお話を終わりたい。

一、名門国泰寺生の誇りと自信を持ち、恥じない生き方を。

二、志は高く、若い時ほど大きな夢を持つと。

三、努力あつての運。幸運はつかみ取るもの。

四、自分の判断と意見を持つ。情報化社会の中で正しい情報を見分けるために先見性とカンを養う。

五、勉強のすすめ、基礎学力が大事である。グローバルの時代に日本人として日本の伝統、歴史を知ろう。

最後に余談になるが大同特殊鋼は「大同フエニックス」という日本一のハンドボールチームを持っている。母校にも是非、ハンドボール部を創設してください。その時は大同のコーチを派遣する。

13年目で初優勝

広商、広陵、国泰寺親善野球



喜びの受賞 高選手(33年卒)

11月3日(土曜日)

絶好の天気の中、第13回三校親善野球大会が広陵グラウンドにて行なわれた。鯉城野球部OB会は、過去1勝1分け、22敗と散々たる成績。やはり往年の名プレイヤーが揃う広陵、広商にはゴルフでは

▽第2試合

国泰寺

0	0	0	0	2	0	0	1
0	0	0	0	0	0	0	3

広商

▽第3試合

広陵

1	0	0	2	0	3
0	0	4	0	×	4

国泰寺

勝つても野球では勝てぬか。しかし、今年の鯉城はひと味違う。『マスターズ甲子園の土』を踏んでいる者ばかり。

試合は昭和30年卒の合屋先輩のクリーンヒット、投げてはヤング(といっても40才)国泰寺の投手陣。簡単に打たれるはずもない。昔は高校球界をならしたプレイヤーも年には勝てず。毎年のことながら珍プレー続出。いつ、どうなるか、わからない試合展開。しかし、いち早く若返りを成功させた鯉城野球部OBは見事に13年目にして初優勝。これもマスターズ甲子園効果か。来年からは各校が立て直してくるだろう。しかし、しばらく鯉城野球部旋風は止まりそうにない。(山本 将司)

加藤画伯

大作を母校へ寄贈



「寸評」 青いリングが横に並べられている。その向こうに何羽かの鳥がとまっていて、上方から一羽の鳥が降りて来ている。鳥はシルエツトで表現されている。そのシルエツトには水墨でいう、たらしこみ的な味わいがある。奥深い印象を作り出している。その微妙な表情と手前の青いリングが面白く対照されている。

(美術誌評より高山淳)

昭和22年卒業の画家加藤正明さんから、思いがけない60号の大作「森からの贈りもの」という油彩画が、母校に贈られた。同窓会総会当日には会場のホテルに持ち込まれ、出席者に披露された。

加藤さんは終戦後いち早く陸上競技部を立ち上げ、県内では常勝一中の名を欲しいままにしたスポーツマンだった。

当時、陸上界ではスエーデンリレー(百、二百、三百、四百、八百、千メートル)が大会の締めくくりの種目になっており、加藤さんはいつも四百メートルのランナーとしてゴールテープを切っていた。当時、学校ではあこがれの選手だった。

加藤さんは一中卒業後、京都美術大学に進み、美術科のある大阪府立港南高校の初代校長になるなど美術を通して教育の発展に務めた。現在は奈良芸術短大教授。84年NHK教育TV「美術の世界」を担当、欧州など取材11回、大阪、東京、広島などで近作展を開催、「近作集」「スケッチ作品集」ビデオ「スケッチ」集など刊行している。

中

平成20年度総会

日時
場所

11月15日(土) 17:00

リーガロイヤルホテル広島

当番幹事

昭和60年卒業生

鯉城関西同窓会総会

3月16日(日)

開催 11:00

ホテル大阪ベイタワー

(旧)三井アーバンホテル

鯉城東京同窓会総会

5月14日(水)

開催 18:30

(財)水交会 東郷記念館

素敵な出逢い「二木会」

発足当初の幹事会。毎月毎に開き議論飛びかう



何で第二木曜日なの？ 温故躍進・夢に向かって

「第二木曜日」のプチ同窓会。「何で木曜日なの？」「何で毎月するの？」卒業して24年後のお役目の当番幹事。試行錯誤の毎日の中、そんな疑問が湧いた。そして月数回、会議を重ねていく。Ⅱ写真。多くの先輩方から譲り受けた資料を基に、一年間の講師スケジュール・クラス世話役担当割り振り・ハガキ案内・予算等々考えていった。

後に、55年卒の先輩方が作られた「プロジェクトR」と広報委員の桑原佐智江さんが文責された、奇しくも昭和59年発行の鯉城同窓会会報「二木会今昔物語」に出逢う。

「第二木曜日」になった理由は、二木会創設（昭和36年）前、田中敬孝先生のクラスを中心にして第二木曜日に集まっていたこと、また、同じ県立高校の県商が月に一回集まっていたことが理由とか。さらに、「当番幹事」が卒業して24年後になったのは、ケネディが42歳で大統領になっており、会に集まっていた昭和10年卒の方がちょうど当時42歳であり、「何か我々もやる

うじゃないか」という話が湧いたからだだったとか。

ともかく、例に漏れず、59年卒の私達にもその当番幹事のお役目が回って来た理由。そして、多くの同窓生にお会いする機会を得る毎に、母校の人力・伝統を再認識し、その魅力にとりつかれていった。そして、多くの助言を得ながら、半年かかってようやく伝統ある二木会講師陣を決めるところまでこぎつけることが出来た。

四月 岡野 尚士氏（57年卒）
五月 谷口 隆志氏（61年卒）
六月 梁川 忠孝氏（37年卒）
七月 森 美喜夫氏（47年卒）
九月 赤木 幹徳氏（24年卒）
十月 三浦ひろみ氏（54年卒）
一月 天野 孝三氏（18年卒）
二月 川上 清氏（21年卒）
三月 根石 紀雄氏（55年卒）



さらに、同窓会発展・集客を増やすため、ひと工夫が必要であった。そして「温故躍進」夢に向かって」という今年のテーマを生かす努力をした。「高校の時の夢」「叶ったかどうか」「現在の夢」「母校の良さ」「高校

の時の思い出の曲」「二木会に期待する事」などアンケートをとり、出席者の過去・ニーズを把握しながら、翌月に発表していった。さらに、お誕生月の方へは、鯉城同窓会オリジナル携帯ストラップやタオルⅡ写真を作成しプレゼントすることに励んだ。

そして、同級生にアナウンスの仕事をしている者が二人いたのをきっかけに、毎月「ホットニュース」と題して、同窓会会員の活躍を伝えていった。幸運にも、野球部OBの活躍により、マスターズ甲子園へのお手伝いや情報提供・テレビ放映も随時行うことができた。

現在のところ、月平均130人を上回る参加者があり、うれしい悲鳴をあげている。参加者の中には、自分達が当番幹事に尽力した方が多く、毎月欠かさず出席しておられる。母校を愛する気持ちがひしひしと伝わる温かいもの。人生半ばにして、新たな出逢い・活性化の相乗効果、同級生との再会など、楽しいことが盛り沢山。母校のため出来る事は、やり遂げたい。そして、多くの先輩達の努力を無駄にしないよう、これからも語り継がれる二木会であって欲しいと願う。このような機会を与えて頂き当番幹事一同より「感謝です。」

59年卒 田中敬子(旧姓 中野)

二百人余が参列

旧広島一中原爆
死没者慰霊祭

今年も7月22日に恒例の広島一中原爆死没者慰霊祭が「追憶之碑」の前で午前10時からしめやかに営まれた。

めずらしく雨降りであったが、浄宝寺諏訪了我住職（昭和24年併卒）の説経が始まる頃には晴れわたり、156名の親御さん親族を含む208名の遺族らが参列した。

慰霊祭は藤原亨校長、田村鋭治同窓会長、水津那緒子校友会長の追悼の言葉で始まった。献花の後、新たに遺族会会長になった秋田正洋さんの

慰霊碑に語りかけるような挨拶があった。

初めに鯉城同窓会と広島国泰寺高等学校、ブラスバンド部、鯉城ステアコールの協力参加により、



「追憶の碑」に向かって話しかけるようにあいさつする秋田新会長

式典が、毎年盛大に開催されていることへの謝辞が述べられた。また三十年間会長を務められた大井前会長の労もねぎらわれた。

一中遺族会は、20年9月に教職員生徒の合同葬時に結成された。昭和21年8月遺族の発案で、「本校教職員生徒戦災死記念碑」

と書かれた3mの白木が校庭の片隅に立てられた。しかし進駐軍から大きすぎるという警告を受け、現在の慰霊碑が建立された。当時の広隆群教頭は「大きな石に綿々と悲しみの文字を綴ったものよりも、この日本一小さな石碑のほうが、はるかに私達の気持ちをびつたりと表現してくれるような気がします。」と言われたという興味深い話を披露された。そして、「まさしく広島一中の精神を後世に伝える大切な慰霊碑である」と、力強く断言された。

ブラスバンドと鯉城ステアコールによる「平和の鐘」「鯉城の夕」そして「千の風になっ

て」は参列者の涙をさそった。この日は62年経った今も、「生き残り組」として特別な想いを持たれている大先輩方の心情を察する大切な日でもある。

来年も7月の第4日曜日に「追憶之碑」の前での再会を約して散会した。

来年こそ出席

戦没学徒の姉からわび状

慰霊祭から5日後の7月27日、戦没学徒一年のMさんの姉という方から電話があった。

「うっかりして一週間先と勘違いしていました。80歳も近くになると…。大変申し訳ありません。会費を送らせて頂きます。

いつも、学校関係の方、コーラスの方、同窓会会員の方達には、気持良く応待して頂き、大変感謝しています。来年は、忘れず必ず出席します」と、さすがに一中生徒の姉らしい「格調のある女性」の言葉を感じた。

後日、丁寧な手紙に添えて会費が送られてきた。きれいな記念切手が貼られて…。

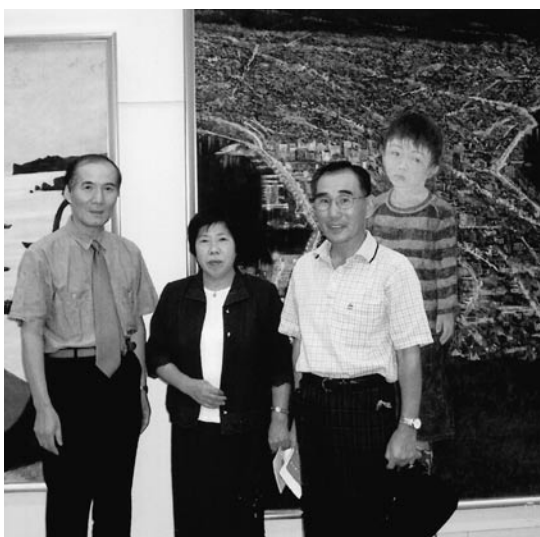
37年卒 竹永さん

広島在住のままで

8月末、広島県立美術館ギャラリーで開催の「広島日展会」で、日展本展の日本画部門で特選を受賞した竹永克彦さん（昭和37年卒）の作品が展示された。受賞作品は「街のあかり」。

子どもの姿をかりて、未来に進み、静かで美しい過去をつくりあげていく気持を表現したと言う。「第38回日展アートガイド」で、授賞理由を「素朴な少年が小高い丘に立ち、背景にはどこまでも続く夜景があり、静かな時間が流れている。」

日展(日本画)で特選



竹永さん(左)と応援に駆けつけた相良さん(右)、永岡さん(中)

母校で新年打ち初め

OBと現役が交流

バレー部OB会が加わって三つの部が新年打ち初めを行う。

【バスケットボール部】

1月3日(木) 10時、体育館

【バドミントン部】

1月3日(木) 13時、体育館

【バレーボール部】

1月3日(木) 13時、西高

体育館



主が集った総会場

夢に向かって

を感じながら

母校の現状を報告する藤原
亨校長

幹事総勢百三十人の皆さん。

挨拶をして
いただる
輩達の様に
見るとき当時の自分
達を思い出し後
輩達の様に
挨拶をして
いただる

の楽曲を歌う湯山
(卒)やっと間に合った。「席はどこや」という先輩を案内する
当番幹事

130周年を記念して加藤正明画伯(22年卒)の右端に60号の油彩画を母校に贈った。受け取る藤原亨校長(左端)



会長から顕彰を受ける今年度の各種賞の受賞者たち。



鯉城同窓会を支える鯉城東京同窓会の山縣氏、鯉城関西同窓会の大津氏、広島事務局長桑野氏の三人。



ご期待に沿えなくて、すみません。サッカー部のコーチ森田先生、校長、教頭の前でしゅん太郎。



今年度の新入会員代表 石原聖史郎君と高畠文菜さん。すっかり緊張していたが。

半世紀も前に卒業した高校三年生が、元氣いっぱいテーブル。33年卒の皆さん



「先生!! お元気ですか」当番幹事の女性徒から声をかけられ大喜びの元担任先生



「私たち30年も前に卒業したの」「ばあさんになるはずだよ」「よく言う、じいさんが」ハハハ楽しそうなテーブル



山崎芳樹先輩も93歳とは思えぬ元気な姿を見せた



流暢な司会ぶり。二人ともTSS、RCのアナウンサーでした。もちろん当番幹事



開会のあいさつをする田村鋭治会長。



夢進躍故温

700人の同窓生

歴史と伝統を

幹事は持つ事が出来ました。後輩たちの為にもこの鯉城同窓会当番幹事の大役を務めあげ、次年度当番幹事予定の昭和60年卒業の後輩に引継ぎます。今年度の総会も多数の同窓生の方々に参加いただきましたこと、そして直前に火災にあった邇保姫神社の救援募金に26万円余の浄財が集まったことなど、お礼を申し上げますとともに、来年1月から3月の残り3回の二木会にも多数参加していただけますことをお願い致します。

昭和59年卒 当番幹事 代表 増原 龍也



会終了後、勢ぞろいした当番

うか?と頭が下がる思いです。母校の様子を見れば見る程広島国泰寺高校の卒業生で良かったと思いますし、母校と鯉城同窓会発展の為にがんばろう!!という思いと、夢を私達当番



「あゝ、楽しかったねえ」と会終了後もなごり尽きない様子の54年卒の三浦ひろみさんたち

よく通る声で得意比呂子さん (39年

設立総会に180人

鯉城関西同窓会が誕生

諸先輩から「ぜひ関西にも鯉城同窓会を創って」と励まされながら、ようやく設立総会にこぎつけた。

3月21日、新阪急ホテルで会員150名を中心に、来賓を含め180名が参加の下、盛大に開催された。母校国泰寺高校の藤原校長、鯉城同窓会の田村会長、東京同窓会の山縣事務局長、近畿広島県人会の広陵高校を初めとする10校の同窓会支部長等が来賓として参加した。

第一部の総会は、巻幡会長の力強い挨拶、来賓の祝辞に続いて参加した。

一年前の平成18年3月18日、発起人会がスタートした。大役幹事長を仰せつかって、若手幹事会の立上げ、女性スタッフの発掘、応援の下、多くの課題に取り組み、初秋に在阪同窓生千余名に会員募集を開始するに至った。

この間、沢山の返信葉書に賛

安田さんら7人を顕彰

平成十九年度、各種の賞を受賞された同窓生の方々を11月10日開催の総会で顕彰した。顕彰された方々は次のとおり。

《叙勲・褒章関係》

▽瑞宝双光章（山口県瓦業界の発展 昭和23年卒）安田圭壮▽瑞宝小綬章（地方自治）昭和29年卒▽大塚啓也▽藍綬褒章

同、応援、期待の添え書きがあり、スタッフは一層勇気、元気づけられた。すれ違っても判らない同窓生との通信に、「同窓」と発する言葉が人の心にどのような気持、つながりを持たせるか、不思議な言葉であることを発見した。先の見えない不安の中、「同窓のご縁、有難み」を

（福祉活動）昭和24年⑤卒 石垣利純

《マスターズ陸上競歩競技での活躍、理論的研究》

昭和18年卒 天野孝三

《日本造工学会大賞》

昭和23年卒 片島三朗

《交通栄誉緑十字金章》

昭和30年卒 大西正勝

《全国厚生年金受給者団体連合会会長表彰》

昭和30年定卒 渡部辰雄

ちよつといい話 三題

▽気持だけでも 昭和27年定時制卒のKYさんから、「終身会費は払っているが、ささやかな気持を受け取ってほしい」との連絡があった。振込用紙を送ったところ、後日、達筆な文面を添えて入金されてきた。品格のある女性の雰囲気を感じた。

▽父の遺志を受けて 昭和13年卒故大久保清憲さんのご令息から、父の遺志として同

追憶の碑の剪定ボランティア 昭和23年卒のSZさんから、「慰霊碑そばのユーカリと豆つ

げの徒長枝を剪定しよう」と申し出を受けた。慰霊祭前の七月十日、あいにくの雨の中を、レインコートを着ながら剪定して頂いた。ムダ毛を落としてサッパリとした佇まいに変わった中で、7月22日、慰霊祭が行われた。

また、同じ申出が前年度当番幹事の昭和58年卒中学校教師のMNさんからもあった。卒業生の心くばりが脈々と受けつがれている良き「伝統」を感じられた。

これほど感じたことはない。

暮れには会員数も160名になり、スタッフ仲間の結束、意気も上って、設立総会に思いを馳せて行くこととなった。

苦しい中にも多くの喜びと充実感のあった一年間であった。

（昭和39年定卒 大津 巧）

51年卒同期会

51年卒の同窓生は二年ごとの同期会を開催します。幹事は10組です。

【日時】平成20年1月4日（金）18時30分～20時30分

【場所】オリエンタルホテル広島（広島県ワシントンホテルプラザ）

【会費】五千五百円（幹事 和泉 忠伸）

編集後記

今年は何をメインに取り上げようかと思索の最中にマスターズ甲子園の話が突如舞い込んだ▼これだ!!と思ったものの幻の甲子園組が同窓会の役員になっていたりして、ちょっぴりてれくさい感じもあるが、まあ、お許しをいただいて、野球部一色にならないよう気を使った60号だった▼それでも若い世代の協力は目覚ましく、編集者にとっては大変ラッキーな会報だった▼なかでも「二木会この一年」を書いたK・TさんやOB講演会取材したT・Hさんの活躍は特筆すべき存在だった▼私にも会報にたずさわるようになって20年になる。このあたりで後進に委ねたいと思っている。（T・H）



来賓も混えカガミ割りで始まった懇親会